

Vent

音楽教育 ヴァン

VOL. 62



巻頭インタビュー

小山薫堂 (放送作家・脚本家)

日常がもっとワクワクする発想論

新連載

ふるさとのと～地域とのつながりが生み出す学び～

那智の田楽

那智勝浦町立那智中学校

取材協力：江田 司 (元名古屋学院大学 教授)

特集

「君よ、大樹たれ」が結んだ出会いと歌声

参考楽譜

同声二部合唱『明かりを灯す人』
とも

(作詞・作曲：宮本益光)

「音世界」が取り結ばれる時間

「ガタンゴトン、ガタンゴトン…」あなたが電車で揺られながら聴くそのリズムは、何拍子ですか？

私はいつからかこのリズムを、4分の3拍子として聴いています。さらにいえば「トン」が小節の1拍目で、「ガタンゴ」はスウィング・リズムの2拍目の裏から始まるアウフタクトです。いったんそのように聴こえると、もうそうとしか聴こえません。でも聴きながらふと考えます。向かいの席に座っているあの人には、どう聴こえている？ 私とはちがう拍子、ちがう強拍の位置？もしかしたら、そもそもこの音自体を意識していない……？

ある人が音や音楽をどのように聴いているのか、いわばその人の中にある「音世界」は、他の誰にもわかりませんし、本人でさえ自身の「音世界」のすべてを言語化することはできません。音・音楽を聴くとき、私たちは自分ひとりだけの「音世界」に在るとみることもできるでしょう。

そのように考えてみると、音楽科の授業において要素や仕組みをあらわす様々な言葉を用いながら、理解や解釈をつくりあげる対話の時間は、知識習得のプロセスというだけでは足りないように思われます。それは誰かと誰かの「音世界」が取り結ばれる時間ではないでしょうか。孤独な「音世界」を出て、すべては叶わない言語化を試み、互いの「音世界」を分かち合い、時としてそれが一人ひとりの「音世界」に変容をもたらす——音楽科にしかない探究が、そこにはあると思うのです。

森 薫(埼玉大学 准教授)

Contents

- 3 | 巻頭インタビュー
小山薫堂(放送作家・脚本家)
- 8 | 授業者に訊く
桐山友布子(西東京市立田無第二中学校 指導教諭)
- 13 | ふるさとのおと ～地域とのつながりが生み出す学び～
那智の田楽
那智勝浦町立那智中学校
取材協力：江田 司(元名古屋学院大学 教授)
- 18 | 特集
「君よ、大樹たれ」が結んだ出会いと歌声
- 22 | Kyogei Presents
音楽診断
[第27回] 出だしから心つかまれるクラシック音楽編
(監修・解説：山田治生)
- 24 | Information
- 26 | 参考楽譜
同声二部合唱『明かりを灯す人』
(作詞・作曲：宮本益光)
- 34 | エッセイ
新・音から広がる世界 [第22回] 藤原道山



*本誌に記載されている職名及び「Information」の内容は令和8年8月現在のものです。
また、「巻頭インタビュー」は取材当時の内容を掲載しております。

巻頭インタビュー

日常がもつと ワクワクする発想論

放送作家・脚本家

小山薫堂

聞き手

ヴァン編集部

今号の巻頭インタビューは、放送作家・脚本家の小山薫堂さんです。数多くのヒット番組や映画を手がけてきた小山さんですが、ラジオやエッセイ、作詞をはじめ、熊本県の大人気PRキャラクター「くまモン」をプロデュースするなど、幅広い分野でご活躍されています。

「日常の“あたり前”をリセットすると、今まで気づかなかった新しい価値が見えてくる」――

画期的なアイデアで人々の心をつかむ小山薫堂さんの発想の原点に迫ります。

Kunelo
Yoyama

はじめは“もったいない”

Vent (以下、V)：これまで多彩なプロジェクトを生み出されてきましたが、その発想力や思考の原点はどのようにして育まれたのでしょうか？

小山：父親からの影響は大きかったと思います。うちの父親はとにかく“もったいない”ことが嫌いで、何をするにもその時間がいちばん楽しいものにしたいというような気質でした。プレゼントをするにもどこかサプライズに満ちていて、僕が子どものときにはお年玉として札束の入ったポチ袋をもらったり、徐に^{おもむろ}ポケットから10万円金貨を渡されたりしたこともあります。札束は全て100円札で1万円分だったのですが(笑)。そんな親のもとで育ったせいか、「せっかくならもっとよくしたい」とか「自分だったらもっとこうするのに」と考えを膨らませる癖が身に付いていった感じですかね。僕はこれを「勝手にテコ入れ」と名付け、さまざまな企画の源にしています。



V：“もったいない”を教えてくれたお父様の存在や、「せっかくなら」「自分だったら」と想像する習慣が、現在の企画や表現活動につながっているんですね。

小山：そうですね。そもそも僕は芸術家肌ではないんですよ。自ら表現したいと思うことは実はあまりなくて、誰かに頼まれると、なんとかしてあげたいという気持ちから考え企画するタイプなんです。ただ、そのお題を見つけるために「もしも今こんなことをしたら、神様はびっくりするだろうな」と思うような行動でフェイントをかけることで、人生の中に新しい出会いをつくるようにしています。

V：具体的にはどのようにフェイントをかけるのでしょうか？

小山：ふだんやらないことをあえてやってみるのです。例えばイタリアに行ったときの体験ですが、現地の友人に紹介してもらった大衆食堂に行ったところ、人気店らしく訪れた人のたくさんのサインが壁に書かれていた。その中に1つだけ日本人の名前を見つけたんです。「森武大和^{もりたけやまと}」って。全く面識のない方でしたが、興味が湧き検索してみると彼のFacebookに行きついたので、勢いでその場からメッセージを送ってみたのです。その後すぐに返信がきて、そこからやり取りをするようになりました。あとから知ったのですが、森武さんはウィーン放送交響楽団の副首席コントラバス奏者で、コンサートツアーで彼が帰国したときに初めてお会いしさらに意気投合。今では仕事で一緒したり、相談を受けたりするような仲です。

V：運命的な出会いですね！

小山：こんなふうに神様にフェイントをかけることで、新しい出会いがあったり題材が舞い込んできたりして、それと向き合ううちに新しい企画を思い付くのです。ただ、空振りした出会いもいっぱいあります。何かのゴールを目指して動くというよりは、日頃から自分がワクワクすることを意識しながら行動しています。言ってみれば、川の流れにのって下りながら、ときどき二手に分かれるときにいきたいと思うほうへ一生懸命オールを漕いで行く。そういうパターンで生きてきました。

V：分岐点の先にどんな出会いが待っているのか、楽しみになりますね。行動するうえで大切にされていることはありますか？

小山：相手をどう喜ばせられるかです。「勝手にテコ入れ」の精神で、出会った人たちがびっくりしそうなことを考えながらお節介みたいなことを続けていると、思いも寄らない企画につながる場合もあります。人を喜ばせることが僕にとっていちばんの喜びなので、どうしたら周りの人に喜んでもらえるかをいつも考えています。

「あたり前」をリセットする——
ベースにあるのは謙虚であること、
それから「他を思う力」だと思
います。



取材は 2026 年1月下旬、都内で行われた

「いただきます」の先に

V: “もったいない”とを感じる価値観を磨くためには、物事の捉え方や考え方も重要になると思います。日常のささいな出来事や慣習の中で見落とされがちなことに気付くには、どうしたらよいでしょうか？

小山: 「あたり前」をリセットすることです。ベースにあるのは謙虚であること、それから「他を思う力」だと思ひます。他を思う力とは人だけではなく物や自然に対しても同じで、日本人が他の国よりも優れている能力ではないのでしょうか。これは僕の勝手な理屈ですけど、まず国土の狭さ。欧米では広い土地に石やレンガで造られた家に住んでいるので、大抵の物音は隣の部屋に聞こえない。一方、日本人は紙と木で造られた家に、襖^{ふすま}1枚隔てた所で家族が寝ていたりする。他の人の足音や寝息すらも聞こえるような部屋で、常に他者を意識しながら生きてきたはずで、肩を寄せ合っ分けて、そういう集団生活の中で生きてきた民族なので、他者を思う力が非常に強いのだと思ひます。

V: 日本人に息づく思いやりの心が発想力を磨く助けになるのですね。

小山: 加えて、日本は地震・火山大国でもあります。地球

上の数%しかない日本の国土にマグニチュード6以上の地震が集中しています。でもその恵みとして温泉が湧いていたり、急激に隆起してできた深い日本海溝に豊かな海洋資源が集まり、おいしいものに恵まれていたり、マイナスがあるからプラスもある。そういうことを考えていくと、いろいろな視点がリセットされていくのです。

V: 2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）で展開されたパビリオンは、食を通して日常のあたり前をリセットし、未来の食の在り方を問かけるといふものでした。謙虚であることと通じる部分を感じます。

小山: 「EARTH MART」では、食のこれからを見せるだけではなく、食を通して「いただきます」といふ言葉の先にある、命をいただくことに焦点を当てました。それをきっかけに、人が謙虚になるというか、あたり前だと思ひていることが実はあたり前ではないと感じてほしいというねらいがありました。1日3食なら「いただきます」をいう機会は3回あるわけですが、そのたびに命に、生産者に、そして命を育む自然に、感謝する。「いただきます」といふ一瞬の間に走馬灯のように感謝の気持ちを思い巡らせることができれば、きっとあたり前がリセットされてより豊かな生き方につながる。僕が企画を通して伝えたかったメッセージがそこに込められています。

352 通の手紙

V: 教育現場でも実践できるような、小さなあたり前の^{ほん}解し方がありますか？

小山: 「謙虚」という言葉は子どもたちには少し難しいですよ。だからこそ、自分の暮らしの中で感じてもらうことがいちばん伝わりやすいかなと思います。1人の命を約80数年間紡いでいくために、どれだけ他の命をいただいているのかを感じるだけでも、あたり前のように食べていることが、どんなにありがたいことが分かるはず。実は先日、母校の熊本県天草市立本渡^{ほんど}南小学校の創立150周年記念式典に呼ばれて、講演会で子どもたちにそのことを伝えました。

V: 子どもたちの反応はいかがでしたか？

小山: 「EARTH MART」の例を通して、「いただきます」の向こうにあるほんとうの意味や常識の解し方について話したのですが、その最後に「よかったら手紙を書いてほしい」と子どもたちに呼びかけました。僕がパーソナリティーを務めるラジオ番組『日本郵便SUNDAY'S POST』で、子どもたちがつづった言葉を全国に届けられたらという思いからだっ



天草市立本渡南小学校の子どもたちから送られてきた手紙

たのですが、後日ほんとうにたくさんの手紙が送られてきたんですよ。

V: すごい数ですね！どれも細かい字でたくさん書かれていて、講演会の内容が子どもたちに響いたのが分かります。

小山: 全部で352通、講演会で心に残ったことが書かれています。おそらく先生方が僕へのサプライズとして子どもたちに書くよう言ってくれたのだと思いますが、その気持ちもすごうれしかったんですよ。ちなみに、僕は学校の創立100周年で地元の展望台がオープンしたときの児童代表スピーチをしたのですが、ちょうど50年後、もう一度同じ場所です。

経験はセンス

V: 趣味や余白の時間が発想や企画につながることもあるのでしょうか？

小山: 僕は仕事とプライベートの境界線がないんですよ。

V: あえてつくっていらっしゃらないのですか？

小山: うーん、なんでしょうね。例えば、鳥って気持ちがよくて飛んでいるというよりも、獲物を探して巡回しているほうが多いのではないかなと思うのですが、そういう意味で、僕の場合は何かおもしろいことがないかなと日々動いているんですよ(笑)。おもしろい種を見つけたら、あの番組で使おうとか、ひと手間加えたらエッセイのネタにできるし、プライベートの遊びにも使えるぞと広がるわけです。だから、仕事とそれ以外の時間で境界線を引く必要がなくて、おもしろいものをどんどん見つけてストックしておいて、あとから分類するみたいな感じかもしれません。



学校の授業って、やり方によってはエンターテインメントにもできるんですよ。

V: 何をされていても常におもしろいものへとアンテナを張っているのですね。見つけた種はどのようにストックされているのでしょうか？

小山: 実は、物覚えが悪いんですよ。人の顔や会ったことさえ忘れて恥をかくこともあるくらいで……。ただ、無意識のうちに深く記憶されていることは幾つかあります。

V: 体験したそのときの身体的な感覚だけが残っているということでしょうか？

小山: そう、そんな感じです。メモを取ることもないですし、あるとき急にふと思ひ出すんです。だから、いかに経験を積むかが大事になるのですが、これはセンスと通じる部分でもあります。センスというのは絶対に豊富な経験からしか生まれないと僕は思っています。博識な両親のもとで育った子どもが鋭いセンスをもち合わせると思われがちですが、決して遺伝的な要因だけではなく、親が子どもに何を経験させたかが大きく影響しているはずですよ。あらゆる体験が少しずつ蓄積されて、センスが磨かれていくのではないのでしょうか。

創造する喜びを

V: 急速なデジタル化とともにAIが台頭する世の中ですが、現状をどのように感じていらっしゃいますか？

小山: AIはほんとうに便利ですが、危険だとも思うのです。デジタルは視覚的あるいは二次元的な認知の中だけで完結する世界なので、勘が鈍るというか……。例えば、車にバックモニターが付いたことでより安全に、そして駐車負担も軽減されたわけですが、その機能がなかった頃は自分の目で後ろを見て、感覚で車幅を捉えてバックしていましたよね。自分の手足の延長として車があるような当時の感覚は今では薄れ、もうモニターを頼らずにはいられなくなっている。AIについても同じで、最初の考えがないままに頼り始めると発想する感覚を失いかねない、その状況に少し不安を覚えています。やっぱり“0→1”^{ゼロイチ}は人間が生み出すべきなんですよ。

V: AIによる感覚の衰えは大きな問題ですね。活用場面の見直しが必要かもしれません。

小山: 0→1をさらに大きくするときに、効率的に進める場面で活用するのはよいと思いますし、0→1を生み出すための、アイデアの壁打ち相手としてAIがあるのはよいかもしれませんね。

V: 子どもたちにも、まずは自ら考えることを大事にしてほしいですね。

小山: 重要なのは、創造する喜びを忘れないことだと思うんですよ。AIから簡単に答えが出てきたら、ラッキーとか得したという感情にはなるとは思いますが、自分の考えがひらめいたとき、あるいは自分の創造したものが人にほめられたときの喜びはもう格別なんですよ。自分が作ったもので誰かが感動したときは、その感動が自分にも返ってくる。それを忘れない、それを身体に染み込ませることが、子どもたちへの教育としてはいちばん大切なこと。

V: そうした視点を私たち大人がもっていれば、子どもたちの創造力はより広がりのあるものになると思います。

小山: 僕は以前『嵐のワクワク学校』という、アイドルグループ嵐の5人が学校の先生になって授業を行うスピーチ・ショーを企画したことがあります。「日々是気付」^{ひびこれきづき}をテーマに、学校ではなかなか教わらない、だけど日常の中でとても大切なことを学ぶ授業を通して、毎日がもっとワクワクするきっかけになってほしいという思いからつくりました。だから学校の授業って、やり方によってはエンターテインメントにもできるんですよ。学校の先生は子どもたちに影響を与えられる存在なので、教科書の内容を教えるだけにとどまらない、感性を磨き、心を豊かにする授業をこれからも実践していつてほしいですね。



● 小山薫堂（こやま・くんどう）

放送作家、脚本家。京都芸術大学副学長。1964年熊本県生まれ。「料理の鉄人」「世界遺産」など多数のテレビ番組を手がけ、映画「おくりびと」でアカデミー賞外国語映画賞、日本アカデミー賞最優秀脚本賞を受賞。「Stand Alone / 森麻季」や「ふるさと／嵐」の作詞も手がける。執筆活動の他、地域・企業アドバイザー、老舗料亭「下鴨茶寮」主人を務め、「くまモン」の生みの親でもある。2025年大阪・関西万博では、シグネチャーパビリオン「EARTH MART」をプロデュース。2026年開館の文化複合施設「MoN Takanawa」では、総合プロデューサーを務める。



全員合唱の様子

Ask the teacher

授業者に 訊く

西東京市立田無第二中学校

授業者：桐山友布子（西東京市立田無第二中学校 指導教諭）

聞き手：森 薫（埼玉大学 准教授）

本時の授業の位置付け

題 材：「創意工夫して合唱しよう!」

教 材：『友 ～旅立ちの時～』（作詞・作曲：北川悠仁／編曲：相澤直人）

本題材は、生徒たちが自ら考え主体的に取り組み、自走する学習を目指している。本時はこの題材に取り組み始めてから5回目の授業になる。合唱コンクールまでの見通しをもち、ただ練習するだけではなく、「場面に合うように表現を創意工夫して歌う」という目標を生徒たちが立て、練習時間も自分たちで組んだ。教師としては、学びの伴走者という役割を模索しながら指導する。

授業の流れ

学習の内容・学習活動	
導入	○ 背伸び、首回し、呼吸、発声、校歌斉唱などのウォーミングアップを行う。 ○ 『友 ～旅立ちの時～』を合唱したあとに感想をクラス全体で共有し、前時までの学習を振り返るとともに楽曲構成を確認する。
展開	○ ソプラノ、アルト、男声に分かれてパート練習を行う（20分）。 ○ パート練習を通して得られた気付きをクラス全体で共有する。 ○ 気付きを踏まえ、再度『友 ～旅立ちの時～』を全員で合唱する。
まとめ	○ 振り返りカードに本時の学習を振り返って記入する。

今回ご紹介するのは中学3年生の歌唱の授業です。10月に開催される校内合唱コンクールに向けて、学年課題曲『友 ～旅立ちの時～』に取り組みます。対談では、多様な問いかけを重ねて生徒の気付きや思考を引き出す、桐山先生の授業づくりについて伺いました。

生徒の思考と成長を導く問いかけ

気付きを引き出す発問術

森：授業を拝見して、先生の発問に対して生徒が答えを自ら考える・発する習慣が身に付いているのだなと感じました。たくさん伺いたいことがありますが……まず、先生の語り口や目線がとても明るくパワフルでした。そして、「元気に歌いましょう」や「声を一つに」など抽象的な言葉ではなく、「足の開き具合を決めて」「斜め上方向を見て」「口は開いてる？」「眉毛を上げてね」など、徹底して具体的な行動へ落とし込む声掛けをされていたのが印象的でした。こうした声掛けは日頃から意識なさっていますか？

桐山：そうですね。音楽を仕上げることよりも、1時間の中で個人の能力をどう伸ばしていくかを意識しています。「今日は何に気を付けるの？」「何をできるようにするの？」ということを生徒に考えてもらうため、具体的な声掛けをしています。

森：「歌い方がよくなったね、今何をしたの？」と尋ねた場面では、生徒から「息のスピードを変えた」「おなかに力を入れた」「息を強くしていった」などの答えが返ってきました。「どうやっ

たら自分がうまくいったか分かった？」「今響きが変わったね、口はどうしたの？」など、“即座に問う・徹底して問う”ことを先生は大事にされているように感じました。

桐山：それはけっこう意識しています。答えを言わなくても生徒が自分で気付けるように、こちらが仕掛ける。自分で気付けたという感覚は、生徒の学びや自己肯定感にもつながるだろうと考えています。

森：授業中に想定外の答えが返ってきたときは、どのように対応されますか？

桐山：想定外の意見もプラスに変えるというか、そういう意見を聞き逃さないようにしたいと思っています。正解の意見だけを取り上げるのではなく、「何それ、おもしろいじゃん！」と受け止めることが大切です。

森：パート練習中に、メロディーを一息で歌うか、カンニングブレスで歌うかについて、意見が分かれたパートがありました。一息で歌えるという生徒が大半を占める中で、ある生徒が「あまり無理しないほうがいいんじゃないか」とつぶやいたのですが、これはパートの中では少数派な意見でしたよね。彼女はカンニングブレスで歌いたかつ

たのだと思うのですが、例えばこういった場面で、先生は生徒をどのように導きますか？

桐山：差異が出たときは両方試すことで、生徒たちにどちらの意見のほうか納得いくかを選んでもらうのがいちばんかなと思います。

森：もう一つ印象に残ったのが、挑発的な問いかけです。最初に合唱したあと、先生は「どうだった？」ではなく、「もう明日合唱コンでもよくない？」と問いかけていました。すると、生徒は「え？」という顔になって。その後「じゃあ、何がだめ？」と問われたことで、生徒は自分たちの合唱の課題点を考え、次々に発言するようになったと思います。おそらく先生はこういった発問をねらってされているのではないですか？

桐山：これまでのいろいろな経験の中で積み重ねてきた部分ではあると思うのですが、必ず生徒が思考するような問いかけにしようと心掛けています。今日は最終的に、生徒が「何を目標に合唱を頑張りたいのか？」ということを引き出したかったんです。理想のクオリティーを彼らに求めるのはなかなか難しいのですが、これまでの積み重ねがあるので、合唱コンクール直前でこの出来はおかしい、もっと表現できていないといけないという気付きはあると思うんです。遠い理想を追うのではなく、今の課題を引き出すために、あのような発問になりました。

歌唱学習の核は歌うこと

森：合唱が終わる度に、すぐにパート内で生徒どうしの振り返りが始まっていましたね。先生は以前ある記事の中で、「各題材でいちばん大事なことは、生徒に表現を工夫させることだ」と述べていらっしゃいました。それを読んで私は、授業中に表現の工夫についてじっくり考える時間があるのだろうと



背伸びのウォーミングアップ



○ 森 薫 (もり・かおる) 埼玉大学 准教授

生徒の自我関与を高める

森：授業中、発問しつつも、個人を当てないという点も、興味深く感じました。先生が発問した際、すぐに一人一人が次々に、自発的に意見を述べていましたよね。それは小学校中学年ぐらゐまではよく見られる光景ですが、一般的には学年が進むにつれ手を挙げて発言することが多くなってくると思います。どのようにしてその習慣が作られるのか、また先生が生徒を当てない意図についてもお伺いできますか？

桐山：生徒の声を取り入れながら授業を進めていきたいと思う一方で、挙手制にすると授業に参加する生徒が偏るリスクもあると考えています。1年次から伝えてきているのは、一人一人が目指すレベルは違っていいけれど、全員が課題意識をもってこの授業に臨むこと、そしてこの50分間を自分の成長のために使ってほしいということです。今では「今日何ができるようになりたいの？言ってみて！」と問いかけると、みんなが自分の目標を一齐に発言するようになりましたが、当初は手を挙げないと発言しづらいルールが徹底されていたクラスもありました。ただ、それだと怖くて声が出せないじゃないですか。なので、歌声に限らずいつでも安心して意見を言えて、何を言っても否定されない雰囲気を作りたいという思いがありました。

森：それが自分で考え、自ら言葉を発する習慣につながっていくんですね。学習者の自主性・自律性を育て、また

思っていたのですが、本時では「歌いながら考える」「歌ってすぐに考える」というように、常に歌唱活動が授業の中心にありました。これは歌唱学習のあるべき姿とも思います。

桐山：ワークシートや話し合いを重ねても、結局大して歌声が変わらないことは往々にしてあって、それが今の音楽科教育、そして次期学習指導要領の課題でもあると感じています。思考・判断、知識・技能は互いに往還します。本人ができたと思っていても、できていないことはよくあって、じゃあ、どうしたら変わるのかを考えたとき、練習することが重要になります。実際に歌い、体を動かす中で気付きが生まれ、それが思考へとつながっていくんです。

森：「歌うこと」が核にあって、それについて思考・判断・表現し、また歌う知識や技能はその往還の中で育まれていくのですね。そこが先生の授業の大きな特徴なのだと思います。本時では、歌詞の書かれた模造紙も使われていましたね。

桐山：あれは生徒が作ったもので、本時から書き込みを始めました。

森：ところどころ歌詞の音読をされていたと思うのですが、音色や言葉の発音を指導するときによく使われる方法ですか？

桐山：そうですね。口をどう動かしたらそういう発音になるのか、音程をつけて歌ったときにどういう音色になるの

かなどに気付いてほしいと思っています。

森：パート練習の際、先生が実況的に声を掛けていらしたのも印象的です。キーポイントとなる箇所や、考えて歌うべきところの直前で、次々と声掛けをされていましたね。

桐山：これは私も悩んでいて、練習中に声掛けをしないほうがいいという考え方もあります。なので、できるだけ合唱の邪魔にならない音色でしゃべろうとは意識しています。

森：先生の語り口がミュージカルみたいなときもありました！

桐山：そうですね(笑)。今日は各パートが円になって練習していたので、教室の前に貼ってある歌のポイントを示したカードが見えないだろうと思い、声掛けをしていました。今の時期は「主旋律は誰？」といったことを、邪魔にならない程度に言っていこうかなと思っています。もう少し合唱コンクールの時期が近くなったら、生徒たちが自走できるように声掛けを減らしていく予定です。



歌詞の書かれた模造紙を使い、演奏のポイントを確認する



パート練習の様子



ソプラノとアルトの練習は別室で行われた



各パートに声掛けしながら練習を見守る桐山先生

保証するには、一人一人の学び方や進め方を認め合う風土も重要になってくると思います。これについて、先生が気を付けていらっしゃることはありますか？

桐山：私は昨年ぐらいから、自由進度学習や個別最適な学びを意識した授業を始めました。例えば、鑑賞の授業中に音源を一人でじっくり聴きたい人と、友達と意見交換しながら聴きたい人とを、別々の教室で学習させるなどの取り組みです。他の人を邪魔しないというルールのもと、一人一人にあった学び方を選択させています。ただ、それぞれのペースで学習が進むと、やる気の差で授業に参加しない生徒が出てきてしまうので、もう少し時期が進んでから、クラス合唱として全員が同じ目標に向かっているのか問いかけたと思っています。また、授業では、1)基礎的に歌える、2)曲を分析する、3)それらを工夫して歌える、4)全体と合わせて歌える、という4つのステップを用意しています。このステップ4)のところで、他のパートを意識しながらどんなバランスで歌ったらいいいのか、どう表現を合わせていけばいいのかといった工夫が出てくるかなと思っています。

森：今日の授業では、「半年後には卒業して会えなくなるんだから、私たち殻を割るしかないよ」と励まし合っている生徒がいて、青春だなと思いました。そして、授業中に生徒からこうした高い度合いの自我関与がうかがえる言葉が出てくるのは、日頃から音楽

の学びが「自分ごと」になっているからですね。

桐山：以前このクラスはみんな小さな声で歌っていたのですが、ほんとうに上達しました。

森：曲の盛り上がりに向かっていくところで、ある生徒が「いきなり大きくするのは唐突で変だし、歌い方としても無理がある。だんだん大きくしていけば無理なく歌える」と話していました。あの気付きは今日の授業においてとても大きなことだったと思うのですが、これは先生がねらって仕掛けたことですか？

桐山：いえ、特にねらってはいませんでした。ただ、題材全体を通して身に付けてほしい力はあって、その目標に向かって生徒がどのような道筋をたどるかが重要だと思っています。クラスによって答えまでのたどり着き方はい

ろいろですので、最終的に気付いてほしいこと、できるようになってほしいことを、発問を通して、生徒主体で獲得してもらいたいと思います。

クラスの困り感に寄り添う授業

森：先生は音楽科の教員になってから、どのように発問力を磨かれたのですか？

桐山：東京都中学校音楽教育研究会(都中音)の研究授業などで鍛えていただきました。発問力の大切さを先輩の先生方に教えてもらったことが、自分の核になっていると思います。生徒に今これを考えてほしい、じゃあどういう発問をすればいいかという感じで、常に生徒に思考させることを考えています。

森：その蓄積の先に、自律的な思考や判断、表現があるということですね。ところで「匠のわざ」と感じたのが、合唱中に生徒の間を移動したり、資料を指し示しながら視線を合わせたりといった身体技法です。

桐山：これはあまり意識していないのですが、私の授業は全体に対する私という構図になりがちで、個別に指導する時間がとても少ないと感じています。なので、歌っている生徒の近くで、この生徒は今どのレベルにいるのか、ど



○ 桐山友布子（きりやま・ゆうこ）西東京市立田無第二中学校 指導教諭



授業のまとめとして振り返りカードに記入する

のぐらいできるようになっているのかなどを確かめています。また、パートの核となる生徒の横と一緒に歌ったり、歌うことに不安を感じている生徒に「できているよ」と言葉を掛けたりすることで、「先生はみんなを見ているよ」というメッセージになればとも考えています。

森：パワフルさの中に温かみを感じたのは、先生のそういった思いがあってのことですね。

桐山：否定はしないように、「あっているよ」「大丈夫だよ」「頑張ってください」という空気感の中で、励ましながら指導したいと思っています。

森：今後の授業に向けた展望はいかがですか？

桐山：校内合唱コンクールを目指すので、とにかくどのクラスも自走できるようになってほしいです。私は分身できないので、全てのクラスへアドバイスしに行くことはできません。こういうことに気を付けて歌おう、ここをもっとこういうふうにしようと、自分たちで試行錯誤できるようになってから、クラスに戻したいと思っています。

森：そういえば、授業の始めに、「思考・判断・表現」、「知識・技能」など、生徒へはしっかりと学期末の評価基準を示されていました。生徒たちは評価の観点をどのように認識しているのでしょうか？

桐山：上級生は私からの説明を受け慣れているので、3観点で評価されていることや、それらが全教科共通である

ことは分かっています。なぜこの評価になるのか、みたいなことは全体に説明してあるので、生徒は「いつものやつね」という感じで受け止めていると思います。

森：授業の最後には振り返りをさせていましたが、そういった活動も今後のコンクールに向けたクラス練習に生きてきますよね。それから、授業を進めていくうえで、前提となる基礎的な技能も大切にされているのだなと感じました。

桐山：ある程度の発声や音取りができないと先に進めないということは、生徒たちも分かっています。なので、「この題材の何回目ぐらいまでに、自分たちが目標とするところまでいきたいの？」ということは確認するようにしています。この振り返りカードには、今日できたことや次に頑張りたいこと、また今日の学び方はどうだったのかな

どを書くように指導します。

森：この振り返りは1年次から続いているのですか？

桐山：続けていますが、1、2年次はあまり具体的なことが書けませんでした。2年次の後半ぐらいからやっと意味を理解し、書けるようになる生徒が出てきます。たくさん書いても評価基準を満たさなければいい評価は付けられません。最近はあまりやらないのですが、いいコメントをみんなに紹介して書き方のヒントを与えることもありました。

森：振り返りの直前、ある生徒が「もう一回歌いたい」とつぶやいていたのが印象的でした。授業の終わりに「もっと歌いたい」という気持ちがあるのは、ほんとうにすてきなことだなと思いました。

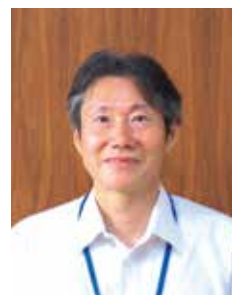
桐山：題材全体を通してここまでとり着いてほしいという目標はあるけれど、今日このクラスの困り感に寄り添って授業を進めたいという感覚もあります。その困り感を生徒自身で見つけてほしい。そうでなければ授業が成立しませんので。

森：まさにそうした先生のねらい通り、生徒たちは具体的な課題意識をもって取り組み、どの活動中も次々と意見やアイデアを交わしていましたね。今日はすばらしい授業をありがとうございました。

校長先生より

本校では、学校経営方針の重点目標として、「生徒が大人になったとき、自らのよさ・強み【資質・能力】を発揮し、自らを生かし堂々と生きていけるよう、未来社会の創り手となるその素地を、引き出し、育てるようにする」ことを掲げています。目標をただ受け止めるだけでなく、自分の考えを適切に表現しながら、実生活で活用できる知識を身に付けていってほしいと願っています。

桐山先生は、学年副主任、生活指導主任、研修主任などを歴任しながら、生徒の意欲を引き出す工夫にあふれた授業を日々実践されています。今後の本校におけるさらなる活躍を期待しています。



三沢英俊 先生
西東京市立田無第二中学校
校長

ふるさとのおと

～地域とのつながりが生み出す学び～

地域を語る、音——。日本各地にはさまざまな伝統芸能が現存しています。

それらは地域の人々によって、子どもたちへと引き継がれています。

では、学校ではどのように取り組まれているのか。

今号より不定期連載として、地域とつながることで生み出される学びを、
クローズアップしていきます。



那智の田楽

那智勝浦町立那智中学校

REPORT

江田 司（元名古屋学院大学 教授）

毎年7月13、14日に催されるユネスコ無形文化遺産「那智の田楽」。様々な変遷を経ながら室町時代の様式を今に伝えるといわれます。五穀豊穡を祈る田楽では珍しい「開墾」に始まり、「田植え」「稲の成長」「刈取り」などを、シテテンの舞とともに約45分、22曲に収め演じます。熊野那智大社の例大祭「扇祭」を前に、地域の中学1年生を対象とした「総合」出前授業が実施されました。

魅力たっぷり紀州熊野・那智勝浦

那智勝浦町は、本州最南端、紀伊半島^{しおの}潮岬（串本町）から北東へ約30kmほどにあります。町は海岸から山間部へと広がり、漁港は生マグロ水揚げ、また那智山にある落差133mの大滝はいつでも日本一を誇ります。さらに県下の源泉数は177に上り、各所にある天然の温泉など魅力をたっぷり味わえる町でもあります。

町立那智中学校（全校生徒131名）は、北方を流れる那智川（全長約7km）の河口近くに位置し、上流約4kmには町立市野々小学校（全校児童32名）、さらに約3km先に那智の大滝、左の山手には「那智の田楽」の舞台が設けら



令和8年度那智の扇祭にて

れる世界遺産・熊野那智大社があります。また、東南方約2km、町の中心部にある町立勝浦小学校（同180名）にまで、校区は広がります。

那智中学校「総合」の授業「那智の田楽」

1年生2クラス37名の生徒が音楽室に集まりました。両側の窓から太平洋が見渡せます。黒板には、令和8年10月25日（日）、町体育文化会館で開催される、国重要無形民俗文化財指定50周年記念公演「那智の田楽」のポスターが貼られています。「那智の田楽」は演じられる日が決まっており、平日が多いこともあって、より広く知ってもらうため休日に公演が企画されました。本時は、「講話→視聴（鑑賞）→実演（鑑賞）→体験→質問・まとめ」の流れで進められました。

熊野那智大社（以下、那智大社）で祭祀を担当する禰宜^{ねぎ}の伊藤士騎さんが、生徒たちを前に、「那智の田楽」と「扇祭」の概要についての話から始めました。

那智大社は12柱の熊野の神様を祀っています。今から約1700年ほど前、本殿を山の中腹に設け、熊野の神々・御瀧^{おたき}（那智の大滝）の神様をお遷ししました。本大社は日本に3社ある熊野大社の元宮のひとつで、そこから分祀された熊野神社は、全国に約5000社あります。

那智大社では、毎年7月14日に「扇祭」を開催しています。「那智の田楽」は、13日の宵宮祭と14日当日の午前に子どもたちの「大和舞（稚児舞）」に引き続いて奉納しています。2012年にはユネスコ無形文化遺産にも登録され、世界的にも注目を浴びています。

廃仏毀釈^{はいぶつきしゃく}の影響により、明治5（1872）年にとだえてしまった歴史をもちますが、大正10（1921）年に人々の努力で復興しました。以来、中世の田楽の姿が100年以上にわたり伝えられ続けています。「那智の田楽」は21曲から成っています。笛方1～2名の調べにのり、ピンザサラ方4名と太鼓方4名によって優雅で、リズムカルな舞や演奏が披露されます。さらに番外に鼓役2名のシテテンの舞が加わります。（以上、大意）

生徒たちの中には、「大和舞」を経験してきた市野々小学校卒の子どもたちも数名いて、真剣な雰囲気教室に漂います。

DVD 動画「那智の田楽」の視聴と生演奏

前方に配置された電子黒板には、仮設とは思えない立派な屋根と本格的な舞台に、出演者全員が静かに登場する姿が映し出されます。約6m四方の舞台を田圃^{たんぼ}に見立てています。それぞれの衣装は、色鮮やかに楽器や役割に



「本座水車」の舞

よって分けられています(写真)。第1曲「乱声」は、とても短い曲です。続く第2曲「鋸齒^{のこぎりば}」では、まず、舞台の左右にビンザサラ方と太鼓方2名ずつが分かれて列をなして立っています。笛の音に合わせながら左右を入れ替え、8名が舞います。しばらくすると様々に隊形が変化します。列が入れ替わる時に、ビンザサラ方が1人または2人と抜け出て正面で単独の振りを行います。様式化されつつ変化に富んだ動きです。この曲は約20分で、全体の半分を構成します。笛のメロディーは、2回繰り返されることが多く、2度目に楽器方は打ち方や舞などに変化を与えます。笛はさらに装飾音などを入れて変化します。本時では第2曲途中から、「休憩」なども早送りして、第10曲「太鼓起す」からは第21曲「皆衆会^{かいしゅうえ}」までの全曲を視聴しました。第20曲「大足^{おおあし}」は、題名どおり円陣のまま開き足になり、左右左と大きく足を上げて踏み込む動作を繰り返します。終盤にふさわしくダイナミックです。ここで、第15曲「本座水車^{ほんざすいしや}」の生演奏を鑑賞することになりました。各楽器と奏法、音色などが紹介され、演技に移ります。教室に響く生の楽器の音は迫力満点です。本格的な衣装を着けて、まさしく舞

いながら演奏する様は、DVD映像では経験できないものでした。このあとの、生徒3人が参加したビンザサラ体験や、質問コーナーなども活発に行われました。(授業終了)

音楽科授業へのヒント

生演奏への生徒たちの驚きの反応を見るにつけ、音楽科授業で「那智の田楽」を取り上げるには、まず「体験をすることが大切だ」と思いました。音楽的要素満載の各曲ですが、【例】3つの楽器や舞の動きが対照的な部分を2曲(例えば「本座水車」「大足」)、抽出します。映像資料を使って、各曲の冒頭から15～(最大)30秒程度までを切り取り、まず笛のしょうがから始めます。続いて唱歌とのタイミングを計り各楽器を模奏、同じく舞の模倣をとおして、間の取り方、問いと答え、所作と音との関連、2つの曲の違い等々の意見を交流しながら体験していきます。このあと「那智の田楽」について調べたり、ほかの部分の視聴(鑑賞)につなげたりして比較しながら、日本に伝わる伝統的な音楽の魅力を感じ取っていきます。



左から吉田遥紀さん、二見正信さん、原敦夫さん

INTERVIEW

聞き手：江田 司（元名古屋学院大学 教授）

伊藤 士騎 講話／熊野那智大社 禰宜

吉田 遥紀 笛／熊野那智大社 権禰宜

小川 一義 那智田楽保存会 副会長

原 敦夫 ビンザサラ／那智田楽保存会 ササラ指導者

二見 正信 太鼓／那智田楽保存会 腰太鼓指導者

林 正太 那智勝浦町立那智中学校 教諭

授業を終えて

江田：すばらしい演奏と迫力にびっくりしました。ビンザサラ方、太鼓方のお二人、笛の響きにも生徒たちは驚いたようです。このように学校に来られるのは今までどれくらいあったのですか？ また、生徒たちの反応はいかがでしたか？

伊藤：那智中学校には去年から出向いて2回目になります。一方、市野々小学校は、児童たちが田楽の前に演じる「大和舞」を務めるため、地域学習の一環で毎年、那智大社へ来られています。

小川：静かに興味をもって見てくれて、うれしく思いました。これを機会に、保存会を守ってくれる若い人が少しでも増えればと願います。

原：ビンザサラ独特の音色、扱い方に興味をもってくれたようです。本番は4名で演じられますが、実際に、「やってみたい！」と希望する生徒さんが何人もいて、うれしかったです。

伊藤：気付かれたと思いますが、ビンザサラの木の薄片が金色です。何も貼られていないのが普通ですが¹、ここではもともと黒いものに、金箔を貼っています。衣装によく映えますよね。

二見：男の子が顔を見合わせて、たたくまねをしていました。本番用の腰太鼓は、紐を締め上げるのもっと音が出ます。本番の太鼓方は4名で、かなりの迫力です。舞台がそんなに広くないので、円になったり広がったり、見た目

はけっこう映えますね。

「那智の田楽」

江田：毎年、いつから練習が始まるのですか？ また、練習の日時や場所は、どのように工夫されていますか？ 演奏のご苦労なども教えてください。

二見：6月20日から宵宮祭（7月13日）前まで、隔日、夜7時から1時間ほどです。

伊藤：現在は28名の保存会メンバーが集まって、境内の斎館²で行います。

吉田：田楽では、笛がたいへん活躍します。神社に務めて12年、もともとお神楽などで吹いて心得はありましたが、田楽を吹き始めたのは、3～4年前です。笛は、フレーズ自体大きな枠組みが決まっていて、それを繰り返します。ほぼ耳で、そして伝わっている譜面も見ながら徐々に覚えました。

原・二見：舞は、笛に合わせて覚えます。笛がもし止まったら、踊りも止まります。実際は「止まるな」って言われていますが（笑）。多くは笛のフレーズの切れ目に合わせて、音を鳴らしますので、笛のリズムやメロディーをきっちり頭に入れます。

江田：曲について教えてください。

伊藤：「那智の田楽」には、21曲（節）の音楽があります。物語は、「開墾」「田植え」から始まって、「稲の成長」「収穫」まで。

小川：第2曲「鋸歯」は、非常に珍しい曲です。ビンザサラを鋸になぞらえて開墾する様子を表します。途中、4人のビンザサラ方は「扇の手」「袖」「曲」「早入り」などの技を、1名や2名などで、4つの部分に分かれて披露します。太鼓はその間、行ったり来たりします。

原：第5、6曲「二拍子」「三拍子」では、田植えのあとの



左から小川一義さん、伊藤士騎さん

1. 「こきりこ節」では白木、浅草三社祭「ビンザサラ舞」では金箔を貼ったものが使われています。

2. 宝物殿とは別の建物で、本殿と広い中庭を隔てて、対面に位置します。「扇神興（みこし）」の作製など祭礼準備に重要な役割をもち、田楽が奉納される仮設舞台は斎館前に設けられます。

一つ一つの稲の成長を表現しています。

伊藤：全編の映像は、(YouTube など) 動画共有サービスで見られます。

「那智の田楽」を未来につなぐ

江田：皆さんのこれまでのご経験をお尋ねします。

原：もともと勝浦在住ですけど、勝浦八幡神社例大祭「^{かい}権祭^{まつり}」で神輿を担いでいました。仕事で那智へ来てから、声をかけてもらって始めました。サッカーチームのコーチもしていて、卒団生(教え子)が4、5人田楽保存会のメンバーになっています。

二見：もともと那智で育って、「大和舞」を踊っていました。しばらくは祭りから離れていましたが、知り合いから声をかけてもらいました。

小川：ずっと那智っ子ですね。親父がずっと那智で商売していたもので。

吉田：特に縁もなく、もともと伊勢の大学に行き、ご縁を頂いて那智大社に勤めさせていただきました。

伊藤：私も那智出身ではないですね。

江田：田楽を始めたきっかけは？ 苦労話などもお願いします。

原：那智にお土産を卸す仕事をしており、たまたま^{おおたいまつ}大松明(25〜50kg)を下ろす役目から。次は、田楽を踊ってみては、と声をかけられました。大松明持ち(本持ち)は、田楽を踊るのが条件です。踊ったあと、すぐ白装束に着替えて持つのですが、バナナや栄養ドリンクを飲む程度の休憩しかなく、慣れるのにすごくかかりました。

江田：舞台へ上がるまで、何年くらいかかりますか？

原・二見：いやもう、すぐに踊りなさいって(笑)。何も指導なしに！

江田：ええ！？

原：うちの田楽は左足から入るのですが、同時にビンザサラを打つ場合と打たない場合があります。そういうのも「ほら見て」って(笑)。今は、手取り足取り教えますけど、私たちの時代は自分で覚えしました。仕事のときも周りを気にしながら足踏みしていました。

二見：ひたすら見たものを記憶に頼ってね(笑)。

吉田：合わせるのは、ほぼ阿吽ですよ。笛に合わせることもありますけど、ある程度踊り手きっかけで。早い話、雅楽のように指揮者のいない現場ですから、アイコンタクトと呼吸を合わせてポンっと入れます。

教科書に載る「那智の田楽」

江田：「那智の田楽」は、小・中・高の教科書に載ってい



江田司先生

ますが、先生や子どもたちに向けて、こういうふうに学んでほしいなど、メッセージをお願いします。

原：子どもたちと地域の関わりが少なくなっています。田楽だけでなく、地域の学習なり催し物に積極的に関わることが、自分の成長につながることも教えていただけたらと思います。

吉田：教科書で学習する以上、他所の地域に民俗芸能があるというところからはじめ、地元のお神楽とか田楽から発展したお能とか全国にありますから、自分の身近な芸能を大事にするきっかけになればうれしいですね。

教師も、総合の授業で初めて知る！

江田：今回の授業を、学校から依頼したきっかけを教えてください。

林：前校長が地元やお祭りを愛する方で、伝統を勉強してほしいという理由で始まりました。勝浦の「^{かん}權踊^り」(和歌山県無形民俗文化財)も保存会の方に来ていただいています。

江田：生徒たちはそれらを見て何かにまとめたりするのですか？

林：レポートにまとめ、文化祭での発表に向けて準備をします。こうした伝統芸能を最近の子は知らないことが多いのですが、「^{かん}權踊^り」は中学生から募集しているので、始めている子もいます。その他、県世界遺産センターの学芸員が文化財について、また元校長もお祭りについて話しています。

江田：先生ご自身は、「那智の田楽」をご存じでしたか？

林：去年の授業までは知りませんでした。その魅力に触れ、家族にも見せてあげたいと思いました。「総合」授業では、地域学とか伝統に触れ合う機会があり、地元のことを知ったり、興味をもったりとか、和歌山県はけっこう力を入れています。授業以外でも、3年生は職場体験があって、熊野那智大社にも行かせてもらっています。やはり生徒たちはお祭りには興味があるみたいで、観に行ったり参加したりする生徒がたくさんいますね。

特 集

「君よ、大樹たれ」が 結んだ出会いと歌声

難病ALSと向き合いながら、^ひ小学校教員として、また合唱指導者として歩み続けている竹永亮太先生と、北九州市立日明小学校合唱部の児童たち。そして、声楽家、作詞・作曲家として活動されている宮本益光さんを結び付けたのは、一つの合唱曲でした。本特集では、三者の出会いから新たな合唱曲『明かりを^{とも}灯す人』が生まれた背景をひもとくとともに、初演の舞台となった「ありがとうコンサート」の様態をお届けします。

日明小学校合唱部と竹永亮太先生

2026年に創立105周年を迎えた北九州市立日明小学校は、2006年度以来、北九州市の音楽科教育の拠点校として研鑽を重ねてきました。その中でも、特に歌うことが大好きな児童たちが集い活動しているのが、日明小学校合唱部（現：北九州日明合唱カンパニー）です。

「心を育てること」、聴いてくださる方に「元気・勇気・ちからを贈ること」を目標に活動する合唱部は、2004年の結成以来、2022、23年の全日本合唱コンクール全国大会において2年連続となる金賞を受賞し、さらに2024年度には第56回北九州市民文化奨励賞を受賞するなど、精力的な活動を続けています。

合唱部の指導にあたるのは、昨年度まで顧問を務めていた竹永亮太先生です。竹永先生は手足や呼吸に必要な筋肉が徐々にやせて力を失っていく「ALS（筋萎縮性側索硬化症）」という厚生労働省指定の難病を抱えながら、教壇に立ち続けています。竹永先生と日明小学校合唱部については、全日本合唱コンクール全国大会で2度目の金賞を受賞した

際に演奏された、宮本益光作詞、加藤昌則作曲の『樹形図』（2013年、教育芸術社）の歌詞の一節“君よ、大樹たれ”をタイトルに冠したドキュメンタリー番組などで詳しく紹介されていますので、ここでの説明は割愛します。

さて今回、本特集を企画するきっかけとなったのが、この『樹形図』の作詞者である宮本益光さんからの一報でした。日明小学校合唱部との交流を通じて宮本さんから竹永先生へ贈られた新曲『明かりを灯す人』が、2026年3月のコンサートで日明小学校合唱部により初演されるとの知らせを受け、会場となった北九州市立響ホールへ向かいました。

「ありがとうコンサート」に響いた感謝の歌声

2026年3月1日、うららかな春の陽気に包まれた日曜日の午後、北九州市立日明小学校合唱部による「ありがとうコンサート」が開催されました。このコンサートは、日頃から応援して下さる方々への感謝の気持ちを込めて、北九州市立日明小学校および同合唱部保護者会の主催により開催されています。プログラムは、第1部の合唱ステー

【プログラム】

第1部 | 合唱ステージ

1. 元気 勇気 ちから (エイミー・カワウチ 作詞／北方寛丈 作曲)
2. 夢をかなえてドラえもん (黒須克彦 作詞・作曲／富澤 裕 編曲)
3. 女声合唱のための唱歌メドレー
「ふるさとの四季」より ～故郷、春の小川、朧月夜、鯉のぼり
(源田俊一郎 編曲)
4. 明かりを灯す人〈初演〉 (宮本益光 作詞・作曲)
5. 樹形図 (宮本益光 作詞／加藤昌則 作曲)
6. ほらね、(いとうけいし 作詞／まつしたこう 作曲)
7. 僕のドラゴン (みなづきみのり 作詞／松下 耕 作曲)
8. 二億年ずつ23回 (里乃塚玲央 作詞／山本純ノ介 作曲)
9. Oh Happy Day (E. R. ホーキンス 作詞・作曲／若松 欽 編曲)

第2部 | 吹奏楽ステージ

(1.～4. 省略)

【共演ステージ】

5. アンパンマンのマーチ
(三木たかし 作曲／本澤なおゆき 編曲)
6. カントリー・ロード (小島里美 編曲)
7. 「となりのトトロ」Highlights
(久石 譲 作曲／星出尚志 編曲)

【アンコール】

ライラック (Mrs. GREEN APPLE)

ジ、第2部のスペシャルゲストと北九州フィルハーモニック吹奏楽団による吹奏楽ステージ、そして両団体の共演ステージという3部構成で展開されました。

第1部の合唱ステージは、竹永先生の指揮と24名の児童による華やかな歌声で幕を開けました。今年度の日明小学校合唱部は、一人も欠けることなくこの日まで活動が続けてきたといいます。曲間には部員たちが交代で司会を務め、振り付けや演出を交えながら全曲を暗譜でのびやかに歌い上げる姿からは、全日本合唱コンクール全国大会常連校としての高い力量を感じました。

4曲目には、宮本益光作詞・作曲による『明かりを灯す人』が初演されました。演奏に先立ち、竹永先生は舞台上で、自身が日明小学校合唱部の顧問となった際、最初に出会った合唱曲が『樹形図』だったこと、2年後のテレビ取材を通じて宮本さんが合唱部を訪ねてくださったこと、そしてその翌年の年明けにこの曲を贈ってくださったことを語りました。日明小学校前校長の肘井千佳先生による歌詞の朗読に続き本曲が披露されると、会場からは大きな拍手が送られました。

第2部の吹奏楽ステージは、竹永先生と合唱部の児童たちとの実話を元にした物語『とびたて！みんなのドラゴン～難病ALSの先生と日明小合唱部の冒険』(2024年、岩崎書店)の著者であるオザワ部長さんをスペシャルMCに迎えて進められました。北九州フィルハーモニック吹奏楽団による迫力の演奏が続く中、中島みゆき作詞・作曲の『糸』では、竹永先生が長年の夢であったという吹奏楽の指揮を務め、会場を沸かせました。

最後の共演ステージでは、北九州フィルハーモニック吹奏楽団の豊かなサウンドを背景に、日明小学校合唱部の児童たちがアンコールを含む4曲を堂々と歌い上げ、「あり

がとうコンサート」は盛会のうちに幕を閉じました。

新たな一步を踏み出して

日明小学校合唱部は、文部科学省が推進する「部活動の地域展開等に向けた取り組み」に倣って、学校単位の部活動から地域の合唱団へと移行し、今年度より「北九州日明合唱カンパニー」の名称で新たな一步を踏み出しました。この春、竹永先生は日明小学校から異動となりましたが、現在も指導者として同団体での活動が続けられています。

『樹形図』が出発点となり、竹永先生と日明小学校合唱部、そして宮本さんとの出会いから生まれた『明かりを灯す人』。続いては、作者の宮本さんに一連のエピソードを振り返っていただくとともに、『明かりを灯す人』に込めた思いを語っていただきます。

(ヴァン編集部)



演奏を披露する日明小学校合唱部の児童たちと竹永亮太先生

明^{とも}かりを灯す人へ

(宮本益光)

「僕もあんな人になりたい」

小学校に赴任してきた一人の音楽の先生が、私の人生を変えた。それまで音楽とはまったく無縁の生活を送っていたが、その先生の着任とともに創設された鼓笛隊に入ったことで、音楽の面白さの虜になった。いや、正確には音楽そのものに魅せられたのではない。その先生に憧れたのだ。

子どもたちのほとんどが音楽好きの学校へと変わるまで、それほど時間はかからなかった。児童たちは皆、「将来は音楽の仕事に就きたい」「音楽が大好きだ」と口にするようになった。子ども心に先生の持つ不思議な力を感じ、その姿に惹かれ、いつしか自分もあの先生のようになりたくて願うようになった。

音楽教師を目指して学びを続けた結果、私は演奏家になった。しかし、音楽を通して人と関わりたいという願いは、別のかたちで叶えられたとも言える。演奏だけでなく、作詞、作曲、指導などを通じて、多くの子どもたちと出会う機会をいただいている。それは何ものにも代えがたい幸せである。

先生は私が高校二年生のときに他界された。最期に交わした言葉は「音楽の先生になりなさい」だった。だからこそ私は、身体が動く限り、子どもたちの未来を願う大人であり続けたいと思っている。

ある日、「子どもたちが歌うことを念頭に置いた作品をつくってほしい」という依頼を受け、作曲家の加藤昌則さんと楽曲を創る機会を得た。そのときに書いた詩が《樹形図》である。

執筆しながら思い返していたのは、小学生だった頃の自分と、あの先生との日々だった。夢という一本の樹は、努力によって枝葉を広げる。枝葉が増えれば実る果実も増える。その果実は一つひとつ異なるが、すべては同じ幹から生まれた可能性の姿である。子どもの頃に教わったそんな

話を、詩として残したいと思った。《樹形図》が大人の口調になっているのは、かつて大人から教えられた言葉を信じていた自分自身と、これから歌う子どもたちの姿とを重ねていたからである。

こうして『樹形図』は完成した。そして幸運なことに、初演した団体は合唱コンクール全国大会で第一位を獲得した。

昨年、知人から北九州市の日明小学校合唱部のドキュメンタリー番組を紹介された。タイトルは、「君よ、大樹たれ」。《樹形図》の冒頭の一節そのままだった。二十分ほどの番組を見終えたとき、私は涙で顔をくしゃくしゃにしていた。顧問の竹永亮太先生は、子どもの頃に私が憧れた先生そのものだったのである。あの頃の夢に、もう一度出会えた気がした。

番組の中で竹永先生は私の言葉について語り、その思いを子どもたちへ伝えてくださっていた。子どもたちは先生の願いを真っ直ぐ受け止め、真っ直ぐ歌っている。自分の体験から生まれた言葉が曲となり、知らない場所で誰かの力になっている。その事実胸を打たれ、私は竹永先生へ感謝の手紙を書いた。

そして2025年12月。私は日明小学校合唱部の演奏を生で聴く機会に恵まれた。実際に耳にした歌声は、想像をはるかに超えるものだった。澄み切った声、伸びやかな響き、そして何より、一人ひとりが歌うことを心から楽しんでいることが伝わってきた。その姿は実に澆^{はつらつ}刺^つとしていて、舞台全体が光を放っているように見えた。

その光の源はどこにあるのだろう。自然と目は指揮をする竹永先生へ向かった。先生は決して前へ出過ぎることなく、子どもたちの声を支え、導き、励ましている。その姿から伝わってきたのは、音楽教育者としての技量以上に、一人ひとりの成長を信じ続ける深い愛情だった。

考えてみれば、私たちは人生の中で数え切れないほどの「明かり」に支えられている。家族、友人、恩師、仲間。迷ったとき、立ち止まったとき、そっと手を差し伸べてくれた人たちである。しかし、その存在はあまりにも自然で、明るいうちは気づかないことが多い。暗くなったときに初めて分かる。あの人がいってくれたから、今の自分があるのだと。そんな思いが、詩の冒頭の

明るくなって気がついた 私は一人じゃなかったと

という言葉になった。「日明小」の校名にも重なるこの一節は、私自身とても気に入っている。

また、合唱という営みそのものも、私には一つの明かりのように思える。歌は誰かの悲しみに寄り添い、誰かの願いを受け止め、言葉にならない思いを響きへと変えていくものだ。

● 宮本益光（みやもと・ますみつ）

東京藝術大学大学院博士課程修了。学術（音楽）博士。オペラ歌手として2003年『欲望という名の電車』の主演で一躍注目を集め、以来、二期会、新国立劇場などで主演を重ねる。作曲家として『樹形図』（加藤昌則作曲）、「うたうたう」（信長貴富作曲）、「ことばを追い越して」（三宅悠太作曲）など、数多くの作品を発表。作曲家として二冊の歌曲集「私の歌」「詩歌こそ私の希い」を出版。MOZART SINGERS JAPAN 主宰。桐朋学園大学教授、聖徳大学客員准教授、東京藝術大学講師。





2025年12月20日の野外ステージで撮影された、日明小学校合唱部と宮本益光さんとの記念写真

誰かの祈りに寄り添って 誰かの涙を歌として

歌は夜を消すことはできない。けれど、夜をこえていく力を与えることはできる。たとえ小さな灯火であっても、その光がある限り、人は歩き続けることができる。

竹永先生と子どもたちの姿を見つめるうちに、私は次第に気がついた。書きたかったのは「先生を讃える歌」ではない。「人を照らす人への憧れ」だったのだ。誰かの人生を支えながら、自らは前に出ない人。誰かの未来を信じ続ける人。誰かの心に静かに明かりを灯す人。そんな人への感謝と敬意こそが、この作品の核になっている。だから詩の最後を、

そんな明かりを灯す人に 私もなりたいた

と結んだ。それは決意というより、願いである。

日明小学校合唱部の子どもたちも、やがて大人になり、それぞれの人生を歩んでいくだろう。その途中で誰かに支

えられ、また誰かを支える側になる日が来るかもしれない。そのとき、『樹形図』や『明かりを灯す人』が心のどこかに小さな灯火として残っていてくれたなら、作者としてこれ以上の喜びはない。私自身、多くの人から受け取った明かりによってここまで歩いてきた。そしてこれからも、その光を次の誰かへ手渡していきたいと思う。

『明かりを灯す人』は、日明小学校合唱部と竹永亮太先生への感謝から生まれた歌である。しかし同時に、それは私自身の祈りでもある。人を照らす人への感謝。受け取った光を次の誰かへ渡していきたいという願い。そのささやかで、けれど確かな思いが、この歌の中に静かに息づいている。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 竹永亮太先生より ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

2025年12月16日、宮本益光先生からお手紙と詩集『樹形図』が届きました。表紙を開くと、「君こそ大樹!!」との揮毫がありました。あふれる涙とともに詩集を抱きしめたあの日のことは、生涯忘れることはありません。

さらに12月20日には、野外ステージで歌う子どもたちに会いに来ていただきました。雨が降り始めても傘をさすことなく、子どもたちをあたたく見つめながら、その歌声に耳を傾けていただきました。そして2026年元日には、『明かりを灯す人』を贈ってくださったのです。

私たちが子どもたちに関わることができるのは、彼ら、彼女らの人生のほんの一瞬にすぎません。また、その限られた時間の中で伝えられることにも限界があります。しかし、お別れをした後も、一緒に歌った曲やその歌詞は子どもたちの心に残り続け、これから先、さまざまな困難や壁を乗り越えていく子どもたちを、きっと支え続けてくれると信じています。

最後になりましたが、宮本先生とのすてきなご縁に、そして『明かりを灯す人』との出会いに、心より感謝申し上げます。



竹永亮太先生と
宮本益光さん

音楽診断

Kyogei Presents

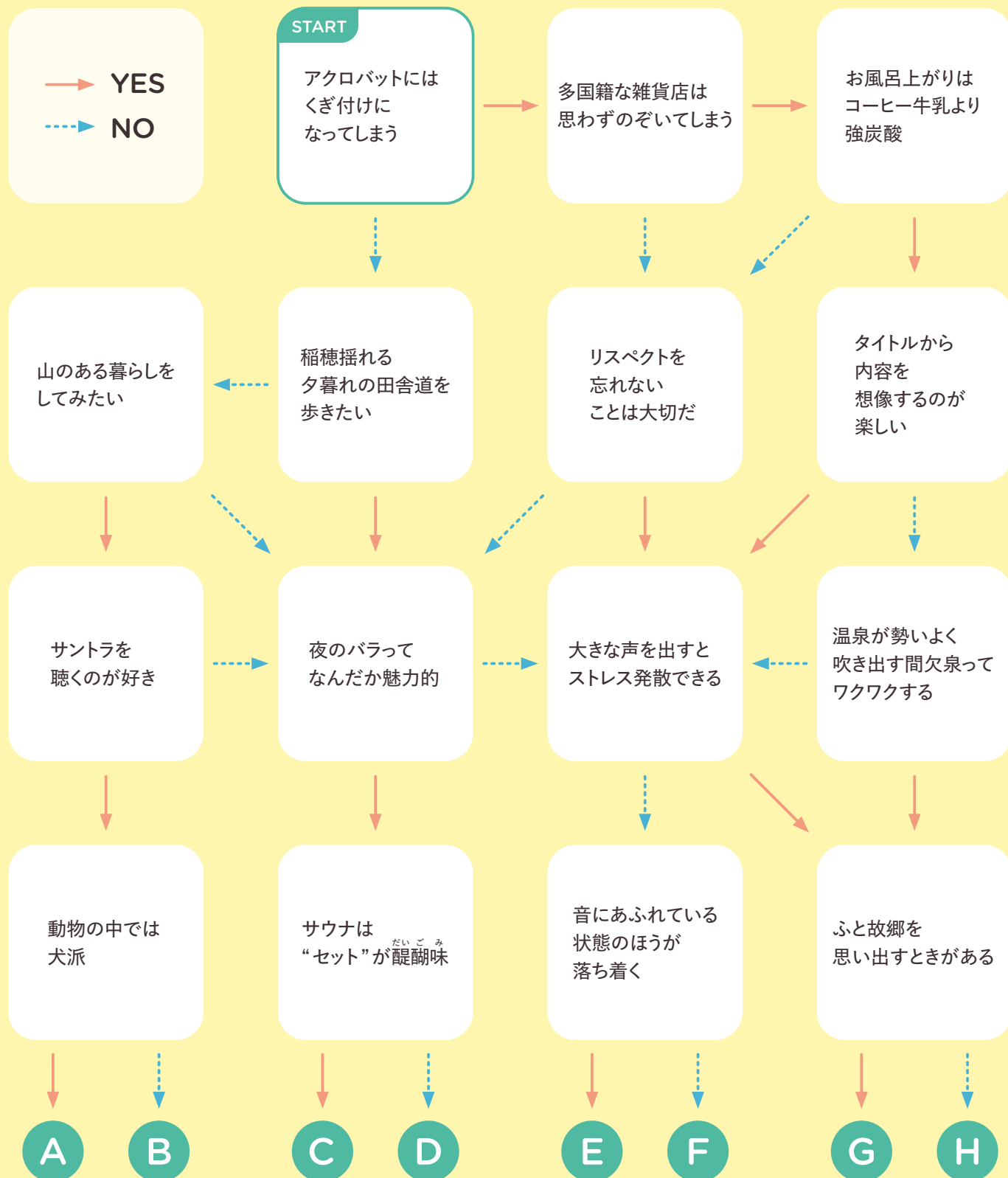
つかみはOK!

第27回 出だしから心つかまれるクラシック音楽編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第27弾のテーマは出だしが特徴的なクラシック音楽。8曲の中から、あなたにおすすめの作品をご紹介します。



監修・解説 = 山田治生 Text = Haruo Yamada

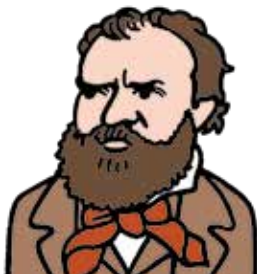


表情豊かに湧き出る旋律

A 『交響曲第8番』 ドボルザーク

ドボルザークは天性のメロディー・メイカーといわれ、哀愁を帯びた旋律で人気がある。交響曲第8番第1楽章冒頭では、チェロとホルンがどこか懐かしくせつなさを含んだ旋律を奏で始める。まさにドボルザークといえる名旋律である。交響曲第8番では、その後もいくつも魅力的なメロディーが現れる。とりわけ美しいのが第3楽章冒頭。

※ 高等学校の教科書では、ドヴォルジャークと表記します



スマートで洒落な技巧

C 『ラブソディー・イン・ブルー』 ガーシュイン

アメリカの作曲家、ガーシュインの『ラブソディー・イン・ブルー』はジャズとクラシックを融合したような、ピアノ協奏曲風の作品。その出だしでは、クラリネットが、特徴的なトリル(2つの音を素早く交互に鳴らす奏法)のあと、超絶技巧的なグリッサンド(音から別の音へと滑らかに音程を変えていく奏法)を披露する。



広大な空間に捧げる総奏

E 『交響曲第8番』 マーラー

しばしば「千人の交響曲」と呼ばれるマーラーの第8番。彼自身はその冒頭について、「宇宙が鳴り響き始める様子を想像してみてほしい。そこにあるものは、もはや人間の声ではなく、周回する惑星や太陽なのだ」と手紙で述べている。実際、オルガンを含む大オーケストラと巨大な合唱によって「来たれ！創造主たる聖霊よ！」と歌い始められる。



故郷を映す瀑布の音

G 『ピアノ協奏曲』 グリーグ

グリーグは、ノルウェーの作曲家。『ピアノ協奏曲』は、劇音楽『ペール・ギュント』と並ぶ、彼の代表作の一つ。ティンパニのロール(トレモロ)のクレシェンドに導かれて、独奏ピアノが最強音で3オクターヴを駆け下りていく第1楽章冒頭は非常に衝撃的である。そしてその後、オーケストラが北歐的な抒情の感じられる音楽を奏で始める。



山田治生

〔音楽評論家〕

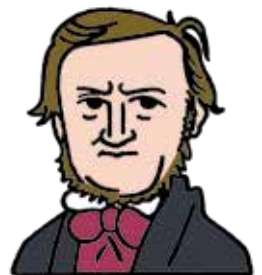
1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ 大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人 ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の楽しみ方』(以上、アルファベータ)、編著書に『戦後のオペラ』(新国立劇場運営財団情報センター)、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』(アルファベータ)などがある。

華麗なる幕開けのファンファーレ

B 『ニュルンベルクのマイスタージンガー』前奏曲 ワーグナー

ドイツの作曲家、ワーグナーは、作曲だけでなく自ら台本も手がけ、数多くのオペラを残した(そのいくつかは楽劇と呼ばれている)。『ニュルンベルクのマイスタージンガー』はワーグナーの代表的な楽劇の一つ。明快なハ長調の堂々たる出だしは、行進曲風であり、その旋律は「マイスタージンガー(親方歌手)の動機」といわれている。

※ 高等学校の教科書では、ヴァーグナーと表記します



優しく響く悲哀の終幕

D 『交響曲第40番』 モーツァルト

モーツァルトの交響曲は約40曲残されているが、その中で短調なのは第25番と第40番しかない。第40番第1楽章冒頭では、ヴィオラが刻むさざ波のような伴奏によって、ヴァイオリンが悲劇的でありながらも美しい旋律を奏でる。一度聴いたら忘れることができないであろう、胸が締め付けられるような名旋律である。



シンプルさゆえの圧倒

F 『弦楽セレナード』 チャイコフスキー

チャイコフスキーの『弦楽セレナード』第1楽章冒頭の弦楽器全員によるドラマティックな音楽はどこかで耳にしたことがあるにちがいない。圧倒的な迫力がありながら、その旋律は、「ドシラソ」とまっすぐ音程を下げていく、極めてシンプルなもの。この第1楽章の冒頭の主題が第4楽章で帰ってくる箇所が、この作品全体の聴きどころの一つである。



とどろく畏敬の歌声

H 『カルミナ・ブラーナ』 オルフ

ドイツの作曲家、オルフの『カルミナ・ブラーナ』は、1935〜36年に作曲された。テキストは、19世紀初頭にドイツのボイレン修道院で発見された、11〜13世紀の神学生や修道僧による世俗的な詩からなる写本によっている。第1曲として大合唱で歌われる「おお運命の女神よ」は、全曲の最後にも歌われ、1つの大きな円環をなす。



Information

2026年に予定されている
主な研究大会やイベントをご紹介します。
※各大会の内容は変更になる場合がございます。

10 October

22日(木)・23日(金)

第67回 九州音楽教育研究大会 熊本大会
第66回 熊本県音楽教育研究大会 熊本市大会

市民会館シアーズホーム夢ホール(熊本市民会館) 他

〈大会主題〉

感じとろう 伝えあおう 高めあおう 音楽のよろこびを

[問い合わせ]

熊本大学教育学部附属中学校 米満 繁
〒860-0081 熊本市中央区京町本丁5-12
TEL 096-355-0375/FAX 096-355-0379
kumaonken@gmail.com

29日(木)・30日(金)

令和8年(2026年)度
全日本音楽教育研究会 全国大会
(幼・小・中・高等学校部会大会) 奈良大会
第68回 近畿音楽教育研究大会 奈良大会

なら100年会館 大ホール 他

〈大会主題〉

音楽で培おう シンの力(心・伸・信・深→真の力)

[問い合わせ]

広陵町立真美ヶ丘中学校 教諭 上西きみ子
〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中2-17-32
TEL 0745-55-0672/Fax 0745-55-0673
ukimiko348@e-net.nara.jp

11 November

6日(金)

第57回 中国・四国音楽教育研究大会 香川大会

全体会会場: サポートホール高松 大ホール 他

〈大会主題〉

ときめく瞬間 響き合う 音と心

[問い合わせ]

高松市立多肥小学校 教頭 合田真理緒(事務局長)
〒761-8076 香川県高松市多肥上町902番地2
TEL 087-889-0537/FAX 087-889-0518
kaonren2026@gmail.com
<https://sites.google.com/view/kagawa-music-2026/>
(香川大会特設ページ)

13日(金)

第68回 北海道音楽教育研究大会 釧路大会

釧路市生涯学習センター(まなぼと幣舞) 他

〈大会主題〉

音楽のよさを分かち合い 確かな力を育む音楽教育

[問い合わせ]

釧路市立春採中学校 教頭 斎藤貴子
〒085-0813 釧路市春採5丁目1-19
TEL 0154-41-5831/FAX 0154-41-5832
kus.onken@gmail.com

13日(金)

令和8年度

第74回 東北音楽教育研究大会

第62回 宮城県音楽教育研究大会 仙台市大会
宮城県高等学校音楽教育研究会秋季大会

日立システムズホール仙台(仙台市青年文化センター)
他

〈大会主題〉

音楽で広げる輪 つなげよう未来へ

～感性を働かせて

仲間と「味わう音楽」「生み出す音楽」～

[問い合わせ]

仙台市立南光台小学校 校長 大槻千秋(実行委員長)
〒981-8003 仙台市泉区南光台7-10-1
TEL 022-251-6330/FAX 022-251-6485

20 日(金)

第68回 関東甲信越音楽教育研究会
栃木大会(那須大会)

大正堂くろいそみるひいホール
(那須塩原市黒磯文化会館)

〈大会主題〉

分かち合い つながり広がる 音楽の学び
～実感! 心が動く音楽の力～

[問い合わせ]

那須塩原市立共英小学校 校長 矢板浩美
〒325-0027 那須塩原市共壘社99-11
TEL 0287-60-1295 / FAX 0287-62-9179
ongaku.nasu@gmail.com

Spring Seminar

スプリングセミナー

— 新作合唱曲による公開講座 —

【開催延期のお知らせ】

毎年春に開催しております「スプリングセミナー 新作合唱曲による公開講座」につきまして、さらなる内容の充実を目指し、2028年以降に開催を延期することといたしました。

より魅力的で実りあるセミナーを皆さまにお届けできるよう、準備を進めてまいります。開催時期などの詳細が決まりましたら、教育芸術社公式サイトおよびSNS等にてあらためてご案内いたします。

今後の展開にどうぞご期待ください。

●お問い合わせ:

株式会社教育芸術社
スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168
FAX 03-3957-1740
<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>

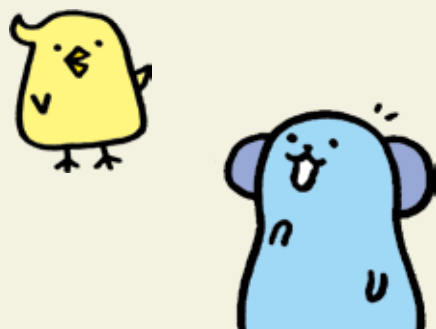


最新情報は弊社公式サイトで
随時公開いたします。
<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は、スプリングセミナーの
Facebookでも発信いたします。
<https://fb.me/kgsspringseminar/>

内容は予告なしに変更となる場合がございます。



教育芸術社公式サイトでは、
上記の研究大会やその他のイベントなどの
情報も掲載しています。

<https://www.kyogei.co.jp/news/event/>





編集後記

令和8年熊本地震、令和8年8月千葉豪雨により犠牲となられた方々に、謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆様にお見舞い申し上げます。皆様の安全と、被災地域の日も早い復興を祈念いたします。

*

—重要なのは、創造する喜びを忘れないこと。

—自分で気付けたという感覚は、生徒の学びや自己肯定感にもつながっていく。

「巻頭インタビュー」「授業者に訊く」にご登場いただいた小山薫堂さんと桐山友布子先生のお話には、これからの音楽科教育に求められる学びのヒントが数多く散りばめられていました。

今号からスタートした新連載「ふるさとのおと」では、日本各地に受け継がれるさまざまな伝統芸能や、その土地の歴史・文化を物語る音楽を紹介していきます(タイトルには「故郷の音」と「故郷note(ノート、音)」の意味を込めています)。

「参考楽譜」には、宮本益光さんの新作合唱曲を掲載しました。作品誕生の背景をひもとく「特集」とあわせてお楽しみいただけましたら幸いです。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
まちよ

写真撮影
島崎信一 (STUDIO S-PLUS)

写真提供
熊野那智大社
藤原道山

イラストレーション
カワチ・レン

表紙デザイン・本文組版
STORK

音楽教育 ヴァン



発行者 株式会社 教育芸術社
(代表者 市川かおり)
〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14
TEL. 03-3957-1175(代)
FAX. 03-3957-1174
https://www.kyogei.co.jp/
©2026 by KYOGEI Music Publishers. ©-26
本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられております。

*ヴァンは「vent」はフランス語で「風」。
新しい音楽教育の地平を切り開いていく
願いを込めています。



Recommend

動画でわかる♪合奏シリーズ

トロピカル ドレミファソダ/ サンシャイン ソラシドレモネード

松長 誠 作曲

- 『トロピカル ドレミファソダ』は、ドレミファソの5音のみで演奏できる鍵盤ハーモニカが主役の低・中学年向け楽曲です。
- 『サンシャイン ソラシドレモネード』は、ソラシドレの5音のみで演奏できるソプラノリコーダーが主役の中学年向け楽曲です。
- パート譜に掲載された二次元コードから、その楽器の参考演奏映像を視聴できます。
- 作曲家からのアドバイスや解説を掲載したパート譜を、書籍巻末からダウンロードできます。
- 各定価3,080円(本体2,800円+税10%)／各A4判／各24ページ(フルスコア・パート譜収録)
- トロピカル ドレミファソダ：ISBN978-4-86779-132-5
- サンシャイン ソラシドレモネード：ISBN978-4-86779-133-2



New Songライブラリー【同声編⑥】

小学生のためのクラス合唱新曲集 一輪の花

- 入学式から卒業式まで、さまざまな場面で歌える魅力的な18曲を収録。作者によるメッセージを全曲掲載しています。
- 収録曲：小さな鳥の 小さな夢の はら／夕焼けの心／きっと届ける／一輪の花／歌と生きる／友情をつばさに／えがおのはじまり／1/6の夢旅人2002／道／過去と未来／ともだち時間／あしたこそ／歌の鼓動／星影のエール／Orizuru／Beautiful Peace／ひととひと
- 定価1,650円(本体1,500円+税10%)／B5判／88ページ
- ISBN978-4-86779-130-1



準拠CD (別売り)

- 価格3,080円(本体2,800円+税10%)／1枚
- GES-16179

クラッピング ファンタジー集Ⅱ

長谷部匡俊 作曲

- 手拍子が主役の器楽合奏曲『クラッピング ファンタジー』シリーズの第2集。第4番から第9番までの6曲を収録しています。
- 曲集の発売と同時に、各種音楽配信サービスで参考音源を配信。また、カットカートンで再生可能なktkファイルも発売中です。
- 定価1,100円(本体1,000円+税10%)／A4判／24ページ
- ISBN978-4-86779-134-9



幼保、小学校、中学校、高等学校

「音楽づくり・創作」の授業デザインⅡ

学びをつなげ深めるアイデアと授業展開

石上則子 監修

- 音楽あそびや歌あそび、音楽づくり、創作を通して、「学びのつながり・深まり」を実感し、児童生徒の創造性や発想力を育む実践事例を紹介しています。
- 小中高の事例では、ICT活用のポイントや、「Aと判断するポイント」などの評価、隣接学年や他校種の学習や活動とのつながりなどを示しています。
- 各事例で紹介されているワークシートやICT関連の素材データの一部は、書籍と連動するWebページからダウンロードすることができます。
- 定価2,750円(本体2,500円+税10%)／AB判／160ページ
- ISBN978-4-86779-129-5



2026年10月
発売予定

オリジナル合唱ピース

- クラス合唱や全校集会、コンクール自由曲向けの作品です。
- 【同声編69】地球は歌うよ(みなづき みのり 作詞／大田桜子 作曲)
またね、またね(宮本益光 作詞／加藤昌則 作曲)
- 【同声編74】樹形図(宮本益光 作詞／加藤昌則 作曲)
- 【同声編112】ことばを追い越して(宮本益光 作詞／三宅悠太 作曲)
- 【混声編115】ことばを追い越して(宮本益光 作詞／三宅悠太 作曲)
- 各定価660円(本体600円+税10%)／各B5判



小学校・中学校・高等学校教科書訂正のお知らせ



教科書及び指導書の訂正を当社ウェブサイトに掲載しています。誠に恐れ入りますが、ご確認のうえ、ご指導の際にはご留意くださいますようお願い申し上げます。

教育芸術社 LINE公式アカウント



ぜひお友だち登録
してください♪